

第21回全国中学生「防火防災に関する」作文コンクール応募作品(原文のまま)

## —— 命を守る地域の消防団 ——

地域で消防団の分団長を務めていた祖父は六十六歳だ。消防団を退団して、最近では、よく釣りに行く。穏やかに黙って二人で一緒に時を過ごす。私に美しいへら鮎の魅力を教えてくれた祖父だ。しかし、私には火災発生の知らせに、仕事をしていた手を止めて現場に駆け付けた祖父の姿が心に刻まれている。「ジージが、ぶっ飛んでいった！」と家族に何度も告げた。上下が青い服にオレンジ色のベルトをした祖父。火が発生したという一斉放送やメールが届くと、祖父の中では、困難に直面している地域の皆さんのことが、第一優先になった。背中「登米消防団」の文字が火災現場に向かって行った。集会所にある消防団の車を運転し、消防団員の仲間とがっちりスクラムを組んで消火に務めた。

私がまだ小学生になったばかりの頃、近くの竹藪で火災が起きた。黒い煙と悪臭、火の勢いがすさまじかった。火事の恐ろしさを、初めて知った。祖父たち消防団は、日頃の消火訓練の成果を発揮した。祖父は分団長として皆に指示を出し、先頭になって鋭く鎮火に集中していた。民家に火が燃え移り、更に大変な事態にならないように心を配った。地域の消防団は命を守る尊い使命があったのだ。

しかし、それ以来私は、「祖父は黒い煙の毒を吸って大丈夫だろうか。やけどをしていないだろうか。」と心配し続けるようになった。祖母が先に亡くなってからも、祖父は危険を顧みず頑張り、後輩の育成にも努めていた。だからこそ祖父が退団した時は、心の底から「ジージ、本当にご苦労さん！」と伝えた。祖父を誇りに感じながらそばに寄り添った。

火災現場には、命の危険が伴う。人の命を救うには、まず自らの命を守り、そのうえで冷静な判断と行動力が求められるのだという。さまざまな状況の火災現場で、正しく状況判断をして血路を示し、安全に避難誘導をして活躍していた祖父。消防士と消防団が命懸けで協力していることを、私たちは忘れてはいけないと思う。そして、市民の一人として、ただ専門の方々に頼るだけでなく、その活躍を知ろうとする気持ちや実際に自分たちにもできることを探し、協力する姿勢が大切だ。

祖父たちは、日常生活を重視し、火の用心の声掛けや見回りを行って防火防災にも時間を割き、注意を促す便り等も配布していた。

祖父のメンタルの強さは、半端ではない。どんなに疲れ、困難があろうともあきらめずに決意したことを成し遂げる。私は祖父のように強くはないが、将来は消防団の一員となって、人のために役立つ人間になりたい。一人では無理なことも、地域の力を結集すれば何かができる。土台となる絆づくりから始めてみたい。例えば、一人暮らしの高齢者や身体の不自由な人も無事に避難できるように駆けつけたいと思う。私も地域の人々の命を守り、支える生き方を目指すつもりだ。

### 消防団員を募集しています

- 【入団資格】  
 ▶登米市内に在住しているまたは通勤・通学している人  
 ▶年齢が満18歳以上の人  
 ▶心身ともに健康な人  
 【問い合わせ】消防本部警防課(消防団係)  
 ☎0220(22)1901

# 人々の命を守り 支える生き方を

中田中2年

## 伊藤 孝太

Ito Kota

第21回全国中学生「防火防災に関する」  
作文コンクール 優秀賞



「全国で賞をもらうのは初めてなのでとてもうれしい」と笑みをこぼす伊藤。第21回全国中学生「防火防災に関する」作文コンクール(全日本消防人共済会主催)において、各都道府県から選抜された47作品の中で2位に当たる優秀賞を受賞した。

中学ではバドミントン部に所属。家での練習は、バドミントン経験者の祖父勇さんに相手をしてもらったりアドバイスをもらったりしている。休日は二人で海や川へ釣りに行くことが多く、祖父と過ごす時間は長い。

消防団員だった祖父からは、団員の努力や住民のために活動する尊い使命があることを聞いていた。消防服を着て現場に向かう祖父は誇りであり、尊敬している。災害などの現場は命の危険と隣り合わせの最前線。そこで活動する消防団のことを多くの人に知ってほしいと考えていた。担任の佐藤先生からコンクールへの出品を勧められたときは、即座に首を縦に振った。

コンクールのテーマは「みんな一緒に、地域を守る消防団」。伊藤は「命を守る地域の消防団」と題した作文の構想を練り始めた。どう表現すれば団

員たちの苦勞を分かってもらえることができるのか。どういう文章であれば地域の安全を守るために奮闘する団員のことを伝えられるのか。悩みなから出した答えは、自分の目で見てきた祖父を、飾らない自分の言葉で書き著すこと。現場では何を考え、どのような行動をするのか祖父に聞きながら、一気に筆を走らせ一週間足らずで書き上げた。

出来上がった作文は、消防団員の活動の様子を生き生きと描き出した。臨場感に溢れる描写は団員の緊張感が手に取るように伝わってくる。応募作は市代表作品として選出。県内でも最も優秀な作品として推薦され全国で高い評価を得た。

佐藤先生は「友達思いで、休み時間も後輩や周りのことを気に掛けてくれる」と話す。自身も「積極的に周りの人の手伝いをします」と胸を張る。これと決めた事にはとにかく一生懸命に取り組む。現在の目標は「バドミントンをうまくなってもっとチームに貢献すること」とどこまでも人の役に立ちたいと願っている。将来は消防団員になることを決意した伊藤。祖父のように人々の命を守り、支える生き方を目指し力強く一歩を踏み出した。